

2016年2月25日／浪宏友ビジネス縁起観塾

## 主体的に生きる

### 1. 概要

阿含經に説かれている「自洲・法洲」の教えについて学び、考察してみたいと思います。

### 2. 「阿含經典」における「自洲・法洲」の教え

#### (1) 經文の掲載場所

増谷文雄編訳『阿含經典1～3』（ちくま学芸文庫）の次の箇所、釈迦牟尼世尊が「自洲・法洲」の教えを説いています。

『阿含經典1』p. 445「人間の分析（五蘊）に関する經典群／蘊相應／31 自洲」

『阿含經典2』p. 214「実践の方法（道）に関する經典群／念処相應／2 病」

『阿含經典2』p. 218「実践の方法（道）に関する經典群／念処相應／3 チュンダ（純陀）」

『阿含經典2』p. 222「実践の方法（道）に関する經典群／念処相應／4 チューラ（支羅）」

『阿含經典3』p. 364「大いなる死／世尊病む」

#### (2) 釈迦牟尼世尊の遺言

上記のうち、「実践の方法（道）に関する經典群／念処相應／2 病」と「大いなる死／世尊病む」で、長老アーナンダに向かって説かれた「自洲・法洲」の教えは、一般に、釈迦牟尼世尊の遺言とされています。

#### (3) 自洲・法洲の教え

これらの經文で、自洲・法洲の教えは、次のように説かれています。

「比丘たちよ、みずからを洲(す)とし、みずからを依処(えしょ)として、他を依処とせず、法を洲とし、法を依処として、他を依処とせずして住するがよい」

#### (4) 洲

増谷文雄博士は、注解で、「洲」について次のように説明しています。

「洲(dīpa=an island between two waters) 河または海のなかの洲であって、それによって、ものみな移ろうこの世における不動の依処を意味するのである」(増谷文雄編訳『阿含經典1』ちくま学芸文庫、p. 448)

「dīpa」には島（洲）という意味と、燈明という意味があります。このため自洲・法洲と訳す場合と、自燈明・法燈明と訳す場合があります。

譬喩を用いずに、自歸依・法歸依と言うこともあります。

### 3. 庭野日敬師の解説

庭野日敬師は、釈迦牟尼世尊が、長老アーナンダに向かって説いた教えを、次のように解説しています。ここでは「燈明」の訳語を使用しています。

#### (1) 何をよりどころにすればいいのか

「それでは、いったいわれわれは何をよりどころにし、何に救いを求めたらいいのでしょうか。ここでわれわれが強く強く思い出さなければならないのは、釈尊が入滅を前にして阿難にいい残された『自燈明、法燈明』の教えです。

『またとない大導師であられる世尊がなくなられたら、いったいわれわれはだれを頼りにして修行し、生きていけばいいのだろうか』—— という阿難の不安に対して、釈尊はこうお教えになったのです。

『阿難よ。あなた方は、ただ自らを燈明とし、自らをよりどころとするのです。他人をよりどころとしてはいけません。また、法を燈明とし、法をよりどころとするのです。他をよりどころとしてはなりません』」（庭野日敬著『法華經の新しい解釈』佼成出版社、p. 338～339）

#### (2) 頼りになるのは「自分」

自燈明・法燈明の教えを受けて、庭野日敬師は次のように述べます。

「この教えほど、正しい宗教の神髄を短いことばのうちがいい尽くしたものはないと思います。『頼りになるのは自分であるぞ』とまず教えられました。他人をよりどころとしたのでは、その他人から見放されれば、あるいは、その人がいなくなってしまうえば途方にくれるほかありません。だから、あくまでも自分で立ち、自分で歩まなければいけないよ、とさとされたのです」

（同、p. 339）

#### (3) 他人は頼りにならない

庭野日敬師は「他人をよりどころとしていたのでは、その他人から見放されれば、あるいは、その人がいなくなってしまうえば、途方にくれるほかありません。」と言います。

自分のために良くしてくれる人がいたとしても、いつかはいなくなります。

自己犠牲をはらってでも自分のためになってくれる他人は、親など、特別な関係にある人だけです。そういう人もいつかはいなくなります。

常にそして最後まで頼りにできるのは、自分のほかには存在しないのです。

#### (4) 自分は頼りない

しかしながら、現実の自分を振り返ると、自分の頼りなさが目に付きます。

- ・ 困難に遭遇した時、どうしていいか分からなくなります。
- ・ よかれと思ってやったことが、裏目裏目に出てきます。
- ・ 一生懸命にやったことが、失敗の連続だったりします。

自分を頼りに生きなさいと突き放されたら、とても不安になります。

## (5) 法(真理)に訊ねて行動する

自分を頼りにしきれない私たちはどうすればいいのでしょうか。庭野日敬師は次のように解説してくれます。

「それでは、その自分は何をよりどころとして生きればよいのか。『法』よりほかにはない。『真理』よりほかにはない。まちがっても、他をよりどころとしてはならないよ —— と、お教えになったのです。(同、p. 339)

## (6) 「法」を頼りにする

頼りにならない自分を、頼りになる自分にしてくれるのが、法(真理)なのです。

- ・ 困難に遭遇してどうしていいか分からなくなったとき、法(真理)に訊ねれば、どうすればいいのか教えてもらえます。
- ・ よかれと思ってやろうとしていることが本当にそれでよいのかどうか、法(真理)に訊ねて吟味することができます。
- ・ 一生懸命にやったことが失敗に終わったとき、法(真理)に訊ねて、失敗の原因を理解し、正しいやり方を知って、失敗を繰り返さないようにすることができます。

「法(真理)に訊ねながら判断し、行動している自分」を外から見れば、実に頼りがいのある姿をしているにちがいありません。

## (7) 「他」とは「神」

よりどころにはいけない「他」について、庭野日敬師は次のように解説します。

「この『他』というのは何を指すのかといえば、とりもなおさず『神』を指すのです。自分の外側であって、自分を支配していると考えられるような『神』、そういうものを頼りにしてはいけない。よりどころとするものは、ただ『法』だけである。『真理』だけであるぞ —— と、力強く教えられたのです。」(同、p. 339)

## (8) 「神」は頼りにならない

① 「自分の外側であって、自分を支配している」という関係は、相対的な関係で「他人」と同じです。自分の外側にあるものは、常にそして最後まで頼りになってくれるという保証がありません。

② 庭野日敬師は、「空」の説明の中で、次のように述べています。

「〈空〉とは、すべてのものごとは縁起の法則によって存在しているのであって、あるものが絶対的存在であるとか、すべてのものごとの根源の存在である、というものは何もないということです」(庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』佼成出版社、p. 16)

「絶対的存在である神」とか、「ものごとの根源である神」は存在し得ないと、縁起の法は語っているのです。

#### (9) 重いことば

庭野日敬師は、自燈明・法燈明の解説を、次の言葉で締めくくります。

「まことに千鈞も万鈞もの重みのあるおことばであって、後世のいろいろなえらい人たちが数かぎりもないほど人生論や宗教論をのべているそのすべてを合わせても、この『自燈明、法燈明』の一語の重みには比べられないと思います」（庭野日敬著『法華經の新しい解釈』佼成出版社p. 339）

#### 4. 法(真理)に対する眼が開けている人

法(真理)に対する眼が開けている人は、自分を法(真理)に照らし合わせて反省し、具体的な修行に励むことができます。これが自燈明・法燈明を実践する姿です。

#### 5. 法(真理)に対する眼が開けていない人

法(真理)に対する眼が開けていない人びとはどうなるのでしょうか。無量義經說法品に、法(真理)に対する眼が開けていない人の姿が描かれています。

「おおくの人びとはこの真理を知らず、目の前にあらわれた現象だけを見て、これは得だ、これは損だなどと勝手な計算をして、不善の心を起こし、さまざまな悪い行為をし、そのためにさまざまな苦しみを受けるばかりで、いつまでたっても、その誤った境界から抜け出すことはできないのです」（庭野日敬著『法華三部經 各品のあらましと要点』佼成出版社、p. 16～17）

法に対する眼が開けていない人々が、自燈明・法燈明を実践することは不可能なのです。それでは、この人たちが救われる道はないのでしょうか。

#### 6. 菩薩への呼びかけ

釈迦牟尼世尊は、菩薩たちに、次のように呼びかけます。

「菩薩のみなさん。このことをはっきり見極めて、衆生にたいするあわれみの心を起こし、人びとを苦しみから完全に救いだしてあげようと決心しなさい」（同）

法(真理)に対する眼が開けていない人びとを、そのまま放っておくことはしないのです。眼を開かせて、自燈明・法燈明が実践できるように導くことを菩薩たちに要請しているのです。

#### 7. 諸仏がこの世に出現する目的

庭野日敬師は次のように述べています。

「仏さまは私たちすべてを、仏の智慧に目を開かせ、仏の智慧の実際を示し、仏の智慧を体験によって悟らせ、仏の智慧を成就する道に導き入れたいという、ただその願いのためにこの世に出現されたわけです」（庭野日敬著『法華三部經 各品のあらましと要点』佼成出版社、p. 2）

あらゆる人に仏の智慧を得させたいという願いは、あらゆる人が自燈明・法燈明を実践できるようにしてあげたいという願いにほかなりません。

## 8. 究極の「自灯明・法灯明」

庭野日敬師は、次のように述べています。

「もしわれわれが、いつも『自分は久遠実成の本仏に生かされているのだ』という自覚を深くもち、『久遠実成の本仏に生かされているかぎりには、そのみ心のおりに生きることが正しい生きかただ』という明快な真実を悟り、本仏のみ心にもとづいて説かれたお釈迦さまの教えにしたがって生きてゆきさえすれば、つねに大自信をもった生活ができ、人生苦などあってもなきにひとしくなってしまうのです。

それがほんとうの人間らしい生きかたであり、この品（妙法蓮華経如来寿量品）は、最大の要点としてこのことを教えられているのです」（庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』佼成出版社、p.169）

これが、自灯明・法灯明の究極のありかただと思います。

## 9. ソフトスキル

ビジネス縁起観では、経営者・ビジネスパーソンが習得すべき基本的なスキルとして、ソフトスキルを提唱しています。ソフトスキルは「人間関係のスキル」「組織活動のスキル」「職務遂行のスキル」「自立のスキル」からなっています。このうち「自立のスキル」は、自燈明・法燈明の教えを基盤にして開発したもので、次のような内容になっています。

### (1) 自主のスキル

自分の主体性を確立して行動するスキルです。

主体性とは、いかなるものごとに対しても正面から向き合い、自分で認識し、自分で考え、自分で判断し、自分で決断し、自分で行動し、そのすべての責任を自分で担うことです。

### (2) 自律のスキル

普遍的な正しい規範を拠り所にして自分を律するスキルです。

自分本位の勝手な規範を立てることもなく、感情に任せて身勝手に振る舞うこともなく、人間としての普遍的な規範、人間関係上の普遍的な規範、社会生活上の規範などを尊重して、主体的・理性的に自分を律するスキルです。

### (3) 論理力

いつでも、どこでも、だれにも当てはまる普遍的な論理で、ものごとを理解し、考え、話し、行動することのできる理性的なスキルです。

### (4) 原理活用力

原因・条件・結果・影響の原理を理解し、活用し、結果を出すことのできる、理性的かつ行動的なスキルです。

## 10. 仏陀が師を求める

不思議な経文をご紹介します。

## (1) 誰を尊び敬えばいいのか

成道直後の釈迦牟尼世尊が、拠り所となるべき師を求めました。

「尊敬するところもなく、恭敬(くぎょう)するものもない生き方は苦しい。わたしは、いかなる沙門(しゃもん)もしくは婆羅門(ばらもん)を尊び敬い、近づきて住すればよいであろうか」(増谷文雄編訳

『阿含經典2』ちくま学芸文庫、p.480)

## (2) 師となりうる人はいない

しかし、釈迦牟尼世尊は、次のように思い返し、自分の師となりうる者はいないことを確信しました。

「もしわたしに、いまだ満たされない戒・定・慧・解脱・解脱知見に関することがあるならば、それを成満(じょうまん)するために、他の沙門または婆羅門を尊び敬い、近づきて住するがよいであろう。

だが、わたしは、天界・魔界・梵天界をも含めたこの世界において、また、沙門・婆羅門ならびに人間界・天上界の住みびとをも含めた衆のなかにおいて、わたしよりもよく戒・定・慧・解脱・解脱知見を成就して、尊び敬い、近づきて住するに値するような沙門もしくは婆羅門を見ることはできない」(同、p481~482)

## (3) 法を依拠とする

自分の師となりうる者がいないことが分かると、釈迦牟尼世尊は、次のように思いました。

「とすると、わたしは、むしろ、わたしが悟った法、この法をこそ、敬い尊び、近づきて住するがよいであろう」(同、p482)

そこへ梵天が現われて、その通りであると讃えました。

## (4) 自燈明・法燈明の始まり

釈迦牟尼世尊は、自ら悟った法を依拠とすることとなりました。自燈明・法燈明はここに始まり、仏教全体を貫いていると、私は考えています。